

六月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

僕の正体

高野公彦 千葉

良き人は七十余年生きて去りぬ良寛、終二、柏崎驍二
春空の白木綿雲よ老人と呼んでくれ、それが僕の正体
救急車着きて止みたるサイレンの余韻の中に夜の病舎あり
地上より「万物斉同」の思想消え今も侵攻と制裁つづく
たぎちゐる大渦巻とその中のしづけき平、鳴門にありき

猫

福士りか 青森

親戚の皆が驚くコワモテの父がデレッツと猫撫でるさま
証券やら権利書やらの保管場所をさらりと言ひて父入院す
突然の父の不在にうろうろと居間を行き来すツンデレの猫
膝に乗りチャウチュール食べる猫あれば父は選びぬ自宅療養
ああ猫を飼つてよかつた誰よりも父の帰りを待つてる猫を

あの日語り

藤野早苗 福岡

とほき目の（あの日語り）はやめませう令和六年いまを生きんよ
昭和から令和へアップデートするまづつれあひを夫と称びて
ペドフィリア、誘拐、監禁、多重婚 「極悪人ね。」「光君です。」
平安の御世の暮らしをなさるなら聴いてあげるわあなたの理屈
つねよりも遅き桜よ身力をたくはへて咲け存分に咲け

驚きぬ

田中愛子 埼玉

言はなかつたけれどやっぱり遅すぎることはあるなり さざんくわに雪
詐欺の手口そのものよりも驚きぬ媼がわたしたる金額に
絆とか寄り添ふだとか向き合ふとかふれあひだとかまして（ふれ愛）
命日よりまだ親しくてははその母の生れ日に餅菓子供ふ
ことばといふ輪郭はなくほんやりと亡き人の声思ふ浅春

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

忘れぬしむかし還りぬ手にとれるゴデイバのチョコをひとりふふめば
ヨーグルトのしろき面に匙立てつガザの赤児ら映りある前
未生なる子らが霜夜に種子播くと語りつぎ来つ 雛菊ひらく
認知症予防ゲームに「荅」の字まちがへしよりつづく憂鬱
アルファベット忘れ果てつつ級友ら春の真つちにねむりてあらむ

武田弘之 神奈川

沖繩の海を四股名に負ふ力士ややはにかみて土俵にのぼる
勝ち負けはさあれ一度も休まずに土俵にのぼる玉鷲が好き
ただならぬ歌とおもひて読み進む奥村晃作のただごと歌を
宮城二の弟子なることの誇り持ち歌学びゆくひとりぞわれは
百までのあと八年をゆつたりと生きてゆきたし歌学びつつ

奥村晃 作* 東京

ヒト我等が創りし機械がヒト我等を支配するなど出来る筈なし
ロボットはあくまでもロボットAIはあくまでもAI主人はヒトだ
機械化の世をば憂うる文明の昭和八年の歌再読す
ワンタツチした瞬間に運賃も銀行口座から引き落とされた
所得格差広げるばかりの政党をなぜ支持するか若者たちよ

森重香代子 山口

家垣は去年刈りしまま伸び揃ひ朝ごとに禽の来て踏みあそぶ
痛む背を椅子に委ねて日もすがら庭を見てをり禽あそぶ庭
段丘の日暮れはさびし早々と門灯ともし錠降ろしたり
今日とても電話なかりきわがことを思ひくれたる人なきごとく
わけもなく涙ぐみつつこの夕べ相撲甚句をわが聞きてをり

影山一男 千葉

春近き江戸川の水ゆふかげに光るを渡る妻へと渡る
妻のなき歌人いくたり思ひつつ妻の味噌汁こよひもすする
走る打つ投げる姿は変らずも名前の読めぬ球児のあまた
わがままな女のやうにほんわりと浮く春の月見上げて寒し
六度目の年男なり性のこと知らず過ぎにし昭和はるけし

桑原正紀 東京

〈介護短歌〉提唱者安森敏隆氏亡くなりてより六年経ちぬ
高校の後輩われを愛しげに迎へたまひき両手ひろげて
いのちを見つめいのちを歌ふたふとさを熱く説かれきあの日あの時
遺志継ぎて「介護百人一首」編む重さをおもふ五年経てなほ
君が蒔きし介護短歌の花のたね年どし咲けり一万数千

狩野一男 東京

東日本大震災から十三年ころに積もる痛みは吾にも
春宵の道をうつむき来る少女スマホ明かりに頼照らされて
GMARCH早慶上理ICU日東駒専 退路を断つて
大変な出来事だつたらしいけど、それでどうなる桜よさくら
終はり方、終はる所を考へてわれ自由なり花の下にて

宮里 信輝 神奈川

令和6年3月1日の「鳥居原」天気快晴雪かむる園

「鳥居原湖畔庭園」めぐりたり梅の花咲き桜はつぼむ

「鳥居原湖畔庭園」さくらはまだ梅のくれなゐ、しろが満開

梅のしろ、くれなゐが咲きもいろの桜が咲ける日にぞまた来む

平成の13年に完成の「宮ヶ瀬ダム」が湛へゐる水

小 島 ゆかり 東京

ゆきかへるころのごとく船見えてうらうらに照る安芸津の海は

風早の浦はるはるとなぎわたり遣新羅使の船かへりくる

保野山に登ればたのし神官も僧も教師も歌のともなる

「あの島のむこうのあそこあの雲の光ってるあのあたりが四国」

早春の海光まぶしがる友の若やかな白のコーデウロイパンツ

木 畑 紀子 京都

三冬を徐々に殖えつつアブラナのやはきみどり葉霜に耐へをり

せいくらべするごと萌黄の茎のびて菜の花を待つ庭の一角

いちめんの菜の花ならね一茎の先端にひとつ黄の花めぐし

閨日のあした初咲き菜の花のいちりに会ふ黄のたまもの

種まくはたのしきかなや芽を花を待つ残日のたつぷりとあり

鳥 田 暉 神奈川

赤芽ふく桜の幹に耳をあて詩をよむやうな水走る音

まだ咲かぬ桜の幹に耳をあて いきほひ上る水の生命は

鈴生りの林檎の花より漏れてくる林檎家族の会話楽しき

桃色の帽子かむりし園児らのゆたかに未来を唄ふ花々

ひらがなのやうな雨降るガラス窓漫画のにはひのこもる幼稚舎

大 松 達 知* 東京

〈への挑戦〉のみ見えている交差点ああずるすと東京にいて

海に来てわれを且つ且つ癒しおり海を見るとは面を見ること

かつてここは東京市外高円寺 ヤットサリ、ヤットヤット、白足袋の舞

未来とはかたむきなながらきざらぎの山手トンネル藻の匂いする

守旧派と額に書いてあるのかな上目遣いで僕を見ている

田 宮 朋子 新潟

根雪なき三月の朝初雪のごとくガーゼの雪降り積もる

去年今年ここ雪国に根雪なく『北越雪譜』の冬は遠のく

春風のかなたの越後三山はさくりと氷砂糖のしろさ

かたくりの咲く山道に微量なる香水ふくむ春風を吸ふ

ももきなす山奥に棲む心地して土日に郵便来ぬのもよろし

津 金 規雄 神奈川

掛け値なしの独りと知れり病み臥してすべてが私を去つてゆく時

リアルありファンタジーありおぞましきもあり昼夜見る病床の夢

病臥してモーツァルトを聴けぬ身に静寂こそは至高の楽の音

病床で読む文庫本手に重く活字にたどる四季のうつろひ

動けないことは視ること病室から目を遣る空の春の色あひ

小 山 富紀子 京都

被きたるシヨールを肩へおろしつづはばたくやうに雪払ふひと

菜をきざみ調理の音の楽しさを補聴器を得し耳に確かむ

この椿^{つばき}有^あ衆^{しゆ}とふ名を持つと聞き上げかけし腰床几に下ろす

買ひし桃^{もも}みななきれいに咲いたえと花舗の主に声かけて過ぐ

布団より腕^{うで}を出せばあたたかしウーンと伸ばして春をつかまむ

清水正子 神奈川

雪の夜は甘酒がいい遠き日に疎闊つ子われを慰めしもの
ゆきひらの湯に溶かしたつ香に酔へり銘酒(白孔雀)の糟糠これは
かぎりひの春一番が窓たたく佳きひとからの電話邪魔して
どんなもんぢや、こんなもんぢやと嘯けり去年より四日早い春一番
綿敷きの菓子箱入りの(薄氷)その口溶けをわれはたのしむ

小嶋一郎 佐賀

左肺には癌の兆しが無くは無しされど模様を見るを医師言ふ
人生の延長戦か米寿過ぎ勝負どころは二年後あたり
新聞紙抜け手足の爪を剪る五十年経て考の真似ごと
春一番過ぎたる二日あとのけふ北風はやはり霰をは連る

風間博夫 千葉

男雛女雛三人官女に五人囃子十人は分るさてその次は
右大臣左大臣並び三人の雑用係「仕丁」の並ぶ

シヨーケース入りミニチュアの飾り雛とはいへ五段ほんほり灯る
男雛女雛桐の箱入り内裏雛二体のみなれどつつしみて出す
アマゾンには長さ五センチ二千円男雛持ちたる笏のみを売る

橘芳園 新潟

見下ろせる蒲原平野の夜の灯り売られし子らのいのちまたたく
蒲原のわが里にきて地平線見てよるこびき京都の友は
薪あらぬ蒲原平野死者たちは藁のやさしき火で焼かれたり
山あらぬ蒲原平野に立つ雲をそばだつ山に見たててながむ
『藤棚の下の小室』二百部の一部を持ちて僻陬に老ゆ

水上比呂美 東京

カーテンのすそにかくれて待つてゐるゐたるたと抱つこされたい赤子
這ひ這ひのハイスピードでやつて来る機関車トーマスみたいな赤子
ねむいときよだれの指でわが顔をさやさやささはるねむたい赤子
子の爪と子の髪の毛はその母の腹の中にて成されたるもの
芙季は母、香葉は伯母なりわれは祖母いづれも母として子に繋がる

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼 一―二―二五〇六

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二―四一―〇

マリノホームズ1A 六花書林

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六



鈴木竹志 愛知

正露丸幼きころは我慢して飲めど周囲は「臭い、臭い」と攻めやまぬ
正露丸糖衣錠なる異なものをわれは好まず百草丸を飲む
二十粒数へる手間のかからねば百草丸は顆粒にしたり
百草丸顆粒を好み求むれど木曾の宿場の薬局置かず
長期戦覚悟したるに御岳の百草丸飲めばたちまちに治癒

原賀 環子 東京

この年もきさらぎの来て西行の月を見んとて望の夜をまつ
花を欠く西行の月 新暦のけふきさらぎのもち月の夜は
聴診は久々にしてふかぶかと息を吸ひをり内科医のまへ
少しだけ雑みのまじる心音のでもしんばいは要らないといふ
聴診器で聞きたしわれも 先生の白衣の奥のしんざうの音

水上 芙季 神奈川

〈赤ちゃんが5分で眠るオルゴール〉は広告なしの百二十分
赤児の泣き声にトレモロ混ざりゆき傘差し掛けるやうに抱き上げ
保育園に行く吾子のため否われのためミツキーのタオルを買ひぬ
ピーマンの皮を剥くことこの一度きりなんだらう 春雨の降る
フィルムシートにチーズの薄さ近づきて日本脱出したし赤児と

大野 英子 福岡

シシユフォスとなりて枯れ芝刈つてゐる前世に咎罪あるわたくしは
枯れ芝を刈れども刈れども映えぬ庭ときに脛、腿攣るなどもして
シシユフォスのひたすらのなか愉樂ふと湧きほくそ笑みし時もあるべし
首すぢに触るるのは君の指およびではなくてはらりと抜けるしらかみ
りり疲れ呑み疲れしてなほながき夜のかざおと聴きつつねむる

松尾 祥子 東京

あらがねの土に吸はるる初雪よつばらつばらにかがやきながら
春の夜を鳩笛ふけばほほーかたはらに來る若き日の夫
ほろ苦きこごみ、タラの芽、落の臺 五臓六腑の虫がめざめる
刻み食お子様ランチ風に盛る嚙下の弱くなりたる母に
厨房のなかに並びて指示を待つ華屋与兵衛の配膳ロボット

鈴木 千登世 山口

和布干す傍へで母は父のこと果てなく話す二十年忌けふ
死の後は老ゆるをひとり止めし父を残念さうに母は言ふなり
ポマードの匂ひ残れるソフト帽蔵ふ納戸のほのぐらき聞
「えらい」とは身体の辛さいふ訛り さみしい母の口癖「えらい」
北浦の稚海藻わかめを干せば古家に潮にはひて春は海から

小島 なお 東京

検査結果見せ合うソファア横顔を領地のように差し出しながら
うづくまるエレベーターの底が春いまひと群れの精子になつて
楽隊の楽器はがらくたではないよ子どもを語る言葉なくとも
木は花を卵のように掲げあげそよぎは始めるその影もまた
それは約束ではなくて、それは選別ではなくてであうだけだと

小田部 雅 子 静岡

斉藤 梢 宮城

札幌の初雪のニュースみるころに届きたりしよほつくり百合根
実を食べてその種埋めて育てるき見たかりけんよまるごとの(生)
びつしりと実をみのらせしアボカドの木につづきるん天上の道
〈生ひ先のたのしみ見ざる覚悟にて時きにしもみち、もみち萌ゆらん
一粒づつ消えてのこりし瓶の底トルコレッドの梅干しの蜜

「東北も能登も」といふ文字朝刊に読めば切なし十一日は
「東日本大震災の日」であれば静かに立ちて静かに座る
珈琲をわかくさ色のカップで飲みそして夫と黙禱をする
あの日からずっと続いてゐる日常 生きて今年も十一日忌
この空は春への扉 三月の十一日を無事に過ごせば

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

六月の味 ―ホヤと酒―

風更^ふけて星遊ぶ濃きひかりあり海鞘食
みてこそみちのくの酒 馬場あき子

一度だけホヤを食べたことがある。仙台
に行つたとき、地元の人に案内されて確か
「魚民」という居酒屋で食べた。ホヤの酢
の物であった。何と言えはいいのか、磯く
さくて不思議な味だった。菌触りはちよつ
とゴムみたいな感じである。しかし一種の
風味があつて、日本酒によく合う。また機
会があつたら食べたいと思つている。

右の歌、宵の口を過ぎて本格的な夜にな

つたころ、きらめく星を眺めながらホヤと
酒の取り合わせを舌で楽しんでゐるのだろ
う。ホヤは癖のある食べ物だが、そういう
物を苦手とする人でも、この美味^{うま}そうな歌
を読んだあとなら食べられるに違いない。
(歌集『青椿抄』より)

ホヤは、歳時記を見ると夏の季語になつ
ており、例えば「着きてすぐ海鞘もてなさ
る口涼し」(野沢節子)などの句が載つてい
る。

北海道・東北の沿岸に棲んでゐるらしい
が、私はまだ実物の生きたホヤを見たこと
がない。広辞苑を引いてみると、――ホヤ

目の尾索^{びそ}類の総称。海産、固着性で、単独
または群体を作る。単体のものは球形から
卵形、群体では板状のものが多し。木質を
含む厚い被囊を被る。出水孔と入水孔とが
あり、水中に浮かぶ微細な食物を水とともに
吸入濾過して食う――云々とある。

また、別の本によれば、幼生はオタマジ
ヤクシ型で尾部に脊索を持ち、海中を自由
に泳ぎ、成長すると海岸の石、海藻、筏な
どに固着する、という。変わった生き物で
ある。

一度、生きたホヤを見たいものである。
そして、ちよつと残酷だけど、できれば生
きたやつをその場で調理してもらつて食べ
てみたい。